

叢書
時代に
生きる④

戦中戦後・京の
一庶民の日記

田村恒次郎
編集・解題

915.

タ

ミネルウ

辛酸

戦中戦後・京の一庶民の日記

田村恒次郎

編集・解題 岡光夫



ミネルウ書房

おつるは鳥羽方面へ、恐ろしい目を盗んで買収に行くが、本年度の農家の鼻意気の荒い事、カブラ一個、びっくりするなかれ金八拾五錢とは、大根や葱を食うていても、薪や醬油等五人口、金貳円位はいる事となった。

正月十五日(月) 幼年時代の小正月風景

この頃ひんぱんに敵機襲撃して、懐かしかりし自分の六十四年前の昔の新年正月気分が思い出される。正月十五日は小正月として、小豆がゆにお餅を入れて朝の御祝に腹いっぱい頂いて、サアこれからサギ足(竹馬)に乗って、隣村まで積雪四、五寸を調子をとり遊びに行くのである。

滋賀県高島郡川上村大字桂、杉原伊兵衛宅の祝日である。南ベラつるの屋根下は、釣し柿が赤く甘味満点だ。このサギ足に乗って手の届かない高い柿の木から二十個ぐらいをとってペロリと平気で食って舌鼓を打つのである。

母は好きな糍より甘酒を造って細長い桶一ぱいに、毎日大茶碗に四、五はい吞まずにはおれなかった。甘酒のむと腹がふくれるから、いやらしやとは昔の言葉である。

宮さんにより集まって、天満書（書き初め）を書いて煮火を炎上させる小正月の行事で、神主松本史先生から子供等にドブ酒の振舞があったが、これは少しも呑まなかった。田舎の小正月を夢に見て。

生涯に忘れる事の出来ない屈辱

憂鬱に徹夜する。

営業にも誰一人来ない。殊更凍寒の夜のロージの光線を、管制消火中に足元なりと思いで電光中に、折り悪しくも嘉楽警防団員の巡視中で、それとは知らず、暗くて服装も見定め難く、来客なりと思つて、

「どうぞ御入り下さい」

と言ったのが悪かった。とたんに胸に針付く、間もなく、

「オイ責任者は誰か、警防団を知らないか、此火は何だ。今日は許さん、本署へこい、これからこい」

「御詫申し上げます。今一度寛大に直ぐに暗くいたします」

「だめだ許さない、本署へこい」

「一体松原の爆弾被害を、気の毒とは思わないか、馬鹿者め。一軒のために多数の迷惑を蒙る事を知らないか」

威丈高、表より上の町の「八字髯」入り来り、

「此老爺は未だもうろくする年でもない、若い者は居らんのか」
大声でどなるのは、人間としての言葉であろうか。自分が悪いと
思っただればこそ、平身低頭して居るにかかわらず、「此オヤジ未だ
モウロクはし居らん」とは。

俊江の頭布、モンペ姿を見て、「オイ頬紅付けて此服装は何のた
めだ」、人間もこう荒っぽくなれば、理も非も判断もさらにない。し
かしながら故意の燈火ではなくして、忘れて居たのであるから、人
として聊かたりとも情味ある可きはす。

私は七十六歳の生涯に於いて、此モウロク老爺と嘲罵せられて、
此程にはずかしめを受けたる事はかつて知らない。

俊江も可愛相に、あの権幕では返す可き言葉もなく、泣き憤慨し
つつ二人で暗幕を其場で着けた。

一夜まんじりとも寝られなかった。本署から呼びに来る必ずくる。
ただ謝罪するより外なし。

正月十六日(火) 爆撃と世相

頻発なる敵米機は日夜の襲撃によって、東京、名古屋、静岡を爆

撃する事幾何十度、殊に名古屋市外の軍需工場生産は、我帝国中第一にして、高六割強とす。此生産高を停滯させたるもの、盲爆撃には耐えきれない。

東京市外に疎開する家具類は、一時騰貴に騰貴を重ねて、桐箆筥一棹老千二、三百円の高級品が、僅かに、二、三月にして僅か金五拾円に売買が出来ている。何品によらず家計用品は、忽ち下落停止を知らずと云う。現在生きるために、食料品は闇から闇で弱肉強食時代だ。

死する者は一足先きに、弥陀の浄土へ。残る者は銃後の難行、修羅場の苦痛に耐え得るや否や覚束なし。いよいよ我百万市民の頭上へ、松原通東山線に盲爆撃被害も相当ありと聞く。

正月十八日(木) 京都松原爆撃の被害

午後三時 出水校から春子帰る。

受持の先生が紙に書いて生徒に知らせられたのは、敵機一機が今日も来たが、警報を発令すると、軍需の生産が後れるから、発令はないのであった。松原の爆弾被害死傷者弐百七十名であった。生徒にその際に、蒲団をかぶり居る者は、負傷はないからと、注意せら

れている。

正月十九日(金) 拝み倒して手に入れた野菜

戦火は益々激烈となりて、食って生きるのに、八百屋の配給では生きられないのは誰でも知っている。娘は東南に走って人蔘やカブや大根を。このカブ一個は拝み倒して金八拾銭也、大根一本金五拾銭也、それでも次からは酒でも持って来ないと相手にして呉れない。我々の毎日の収支が、相伴わざるのはもちろんである。収入は敵機と共に南へ、南へ、脱出している。一先ず、警戒警報解除いたします。

中部司令官発表

正月二十一日(日) 東寺の露店見物を断念する

弘法大師さんの露店をヒヤカスのが私の一ヶ月毎のたのしみ、道楽としている。本年の正月より電車にのるにも、徒歩するも戦時服装でなければ、折角並んでいても車掌が乗せないし、乗っても突き落とす。玉突屋が突き落とされては、これは問題にならない落第だからネ、毎月の道楽も残念ながら断念するほかはない。



人蔘、カブラ、大根を拝み倒して手に入れる

正月二十三日(火) 島原ガス会社の爆撃

とうとう落としようとした、島原瓦斯会社に爆弾が投下された、ドドドカン。其響きはドカンピリピリ物凄い震動に街路へ、窓から顔を出して下を見ると、午後一時良く真赤に燃えている、島原瓦斯だ。しかしながら被害の程度は秘密で知る由もない、龍安寺、連華堂に焼夷弾が落ちた、これは早く消し止めたらしい。

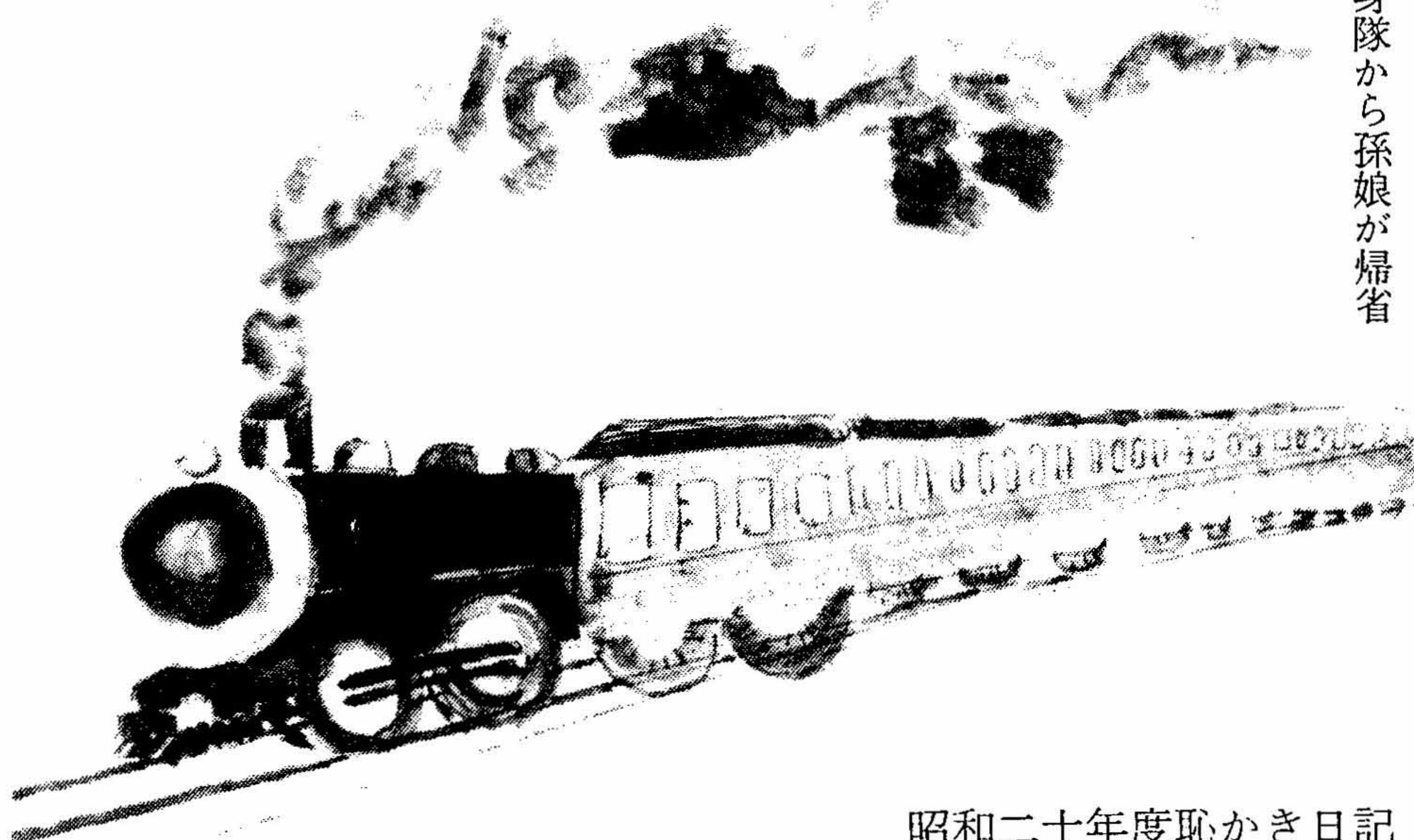
東山線松原の十四日の真夜中の時には、二百七、八十名の死傷者があったと、出水校受持の先生より各生徒に伝えられているのは、其通りであろう、今日が京都市への第二回目の投下であろう、相当に死傷者のあった事は気の毒な訳である。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、合掌する。

正月二十四日(水) 孫娘の帰省と挺身隊生活

半田市より挺身隊澄子の宿入りだ、土産品として、俊江に可愛らしい下駄一足、春子にも可愛らしい下駄一足、サツマ芋、乾スルメ、沢山。

職業(作業)は秘密で親にも明かさないが、軍需品と承知されたい。

挺身隊から孫娘が帰省



叢書・同時代に生きる④

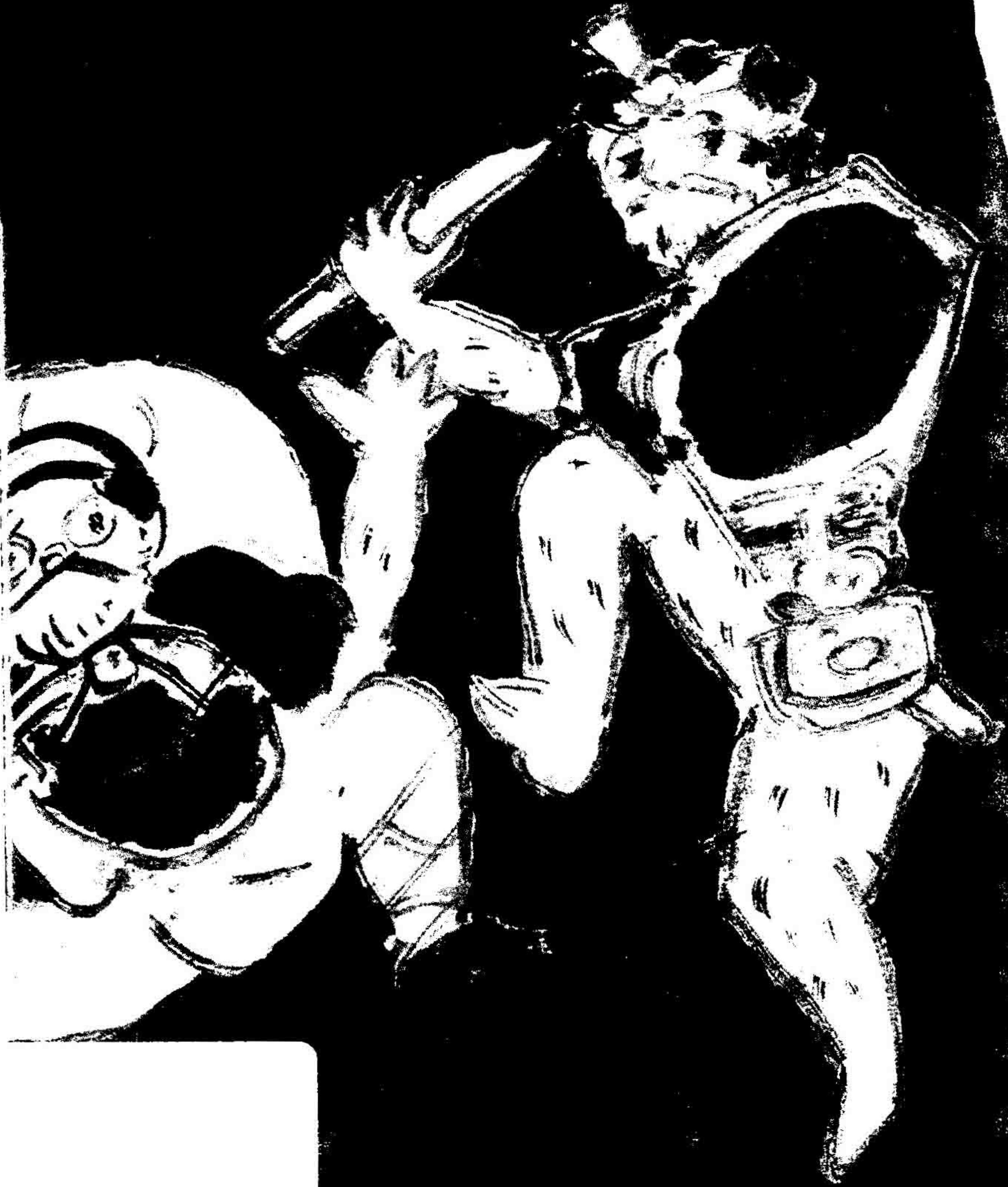
京都市右京中央図書館



331328194

M748AA2

13042013



1320-63724-8028

定価=1400円